

目的 衣服の考察には、素材、型、色柄を無視できないが、“ねたきり老人”の場合には特に、本人の着心地と看護・介護の“しやすさ”が重要な要件である。“介護しやすさ”、“着脱させやすさ”は、ねたきり老人と介護者の抱える日常生活上の問題群の中の一つである。本研究は、この“着脱させやすさ”に着目し、ねまき生活の実情を明らかにし、ねまきの型ごとにもう改良したらよいか検討することにした。

方法 質問紙を郵送して回答を求める方法を採用した。調査対象は特別養護老人ホームの介護者とし、東京を中心とする1都10県に開設されている329施設を調査対象施設とした。回収票は110票、回収率は33.4%であった。集計は手集計(カード法)によった。昭和61年10月現在、要介護老人62万人(厚生省発表)であるので、統計学上は、この調査研究は事例研究であることを付言しておく。

結果 この調査では疾病の種類、症状を調査事項に含めていないので疾病・症状別の“着脱させやすさ”の実情は不明である。一般に、ねたきり老人は、痲痺、痴呆、失禁という障害をもち、おむつ使用、カテーテル使用などの問題を抱えているので、この点を無条件に前提として分析した。①ねまきの支給は、経営主体および経営規模により有意差が見られた。②着脱させやすさでは、パジャマ(洋)、長着、特別ねまき、その他、二部式(和)、パジャマ(和)の順になっていた。③ねまきの改良意見は、累計で88件あった。④改良意見は、上衣に関しては、袖と身ごろに関わる意見が多く、ズボンでは腰まわり、股上についての意が多かった。⑤ねまきの型別に注目される意見があるが、研究発表時に詳細発表する。